

ケーススタディ：報恩講「サイコウ」プロジェクトを考えよう

1 過疎の町に佇む小さなお寺

真宗大谷派淨慶寺（じょうきょうじ）は、T駅から車で20分ほど走った山間の町にある所属門徒30戸ほどの小さなお寺だ。

住所は、10年前の市町村合併で滋賀県M市に変わったばかりだが、数十件の住宅が建ち並ぶ小さな町の実態は「市」と名乗るにはあまりにもほど遠く、過疎と少子高齢化の影響が強い。当然、若い世代が町に残らなくなってきたため、集落にあった小学校も15年前に廃校になった。このまま町が無くなる日も遠くは無いと、地域の方々はため息交じりにそう呟いている。

周囲を見渡せば、北陸地方との境にある山々が連なり、近畿地方でも有数の豪雪地帯でもあるため、冬は多くのスキーパークが押し寄せている。また、規模は大きくはないものの、鄙びた雰囲気の温泉も評判で、琵琶湖岸にも近いことからマリンスポーツや魚釣りも盛んであることから、夏のレジャー時期には市内を走る幹線道路が慢性的な渋滞を繰り返すほどである。

ただ、夏や冬の観光シーズン以外は、最寄り駅であるT駅には1時間に1本の上下線が停まるだけで利用者も少なく駅前には個人商店すらない。また、地域の中にあった「万屋」的な個人商店も、7年前に店の主人が亡くなつたために店を畳んでしまい、今では日用品の買い物をするにも約40km離れた大型スーパーまで行かなければならない。ただでさえ、運転免許証を持っていない高齢者が多い地域だけに、日用品の買い物はまさに「死活問題」であり、子どもと同居している同じ地域の家に頼んで買い物を代行してもらっている高齢者もいる。

しかし、それでも多くの高齢者は地元を離れたくないとの思いが強い。転居先で新たな関係作りから始めるだけの体力は残っていないし、何より自分や大切な家族が生きてきた記憶が刻まれた地域を離れることは耐えがたい。自分が亡くなるその時までは、何とか生まれ育ったこの地域で暮らしたいという切なる思いが多くの高齢者を地元にとどまらせているのだろう。

一方の子ども世代に眼を向けると、車で1時間から2時間の範囲にある大津市や京都市で生活していることが多いようだ。高齢者世代のように地元に定着とまではいかないまでも、就労世代もまた大阪市や京都市の企業に就職し関西圏にとどまって生活しているという世帯が確かに多い。統計的に見ても、滋賀県の人口のうち8割以上は転居したとしても近畿圏に滞留する傾向が強いとも言われており、東京へ出て行ってしまって二度と再び戻ってこないという人口は3%にも満たない。もちろん、就労世代が地元に戻って定住する可能性は低いが、地元で最期を迎えるという年老いた両親の思いを受けとめ、その世話をするために週に1回もしくは月に1回程度の頻度で実家に戻っている就労世代は意外にも多い。

ただ、就労世代の別居は、地域の農業にも大きく影響しており、高齢者だけでは田畠の世話をすることもままならないと、農地を農協に委託して農業をやめる世帯が増加している。農業の衰退は世帯の賃金に影響を与えるだけではなく、食物自給率にも強い影響

を与え、地域に残る高齢者の生活が強く圧迫されることは避けられない。全部委託であれば農地からの収入は期待できず、僅かな年金収入と貯蓄だけで生活することは、高齢者にとって大きな不安を与えるものだと言えるだろう。

2 父の急逝をきっかけに継承した「Uターン住職」

実は浄慶寺の藤原 慶信(ふじわら きょうしん)住職（45歳）も、「Uターン組」の人でもある。ただし、完全な「Uターン」ではなく、家族だけを先にお寺へ帰し、今のところは大阪で単身赴任中。週末は、法務のためにお寺に戻っている。

お寺へ家族を帰す事になったきっかけは、3年前に父親であった藤原 浄信(ふじわら じょうしん)前住職（当時72歳）が急逝したことだった。

浄信前住職は、地元の高校で教員をしながらお寺の住職を務めていたため、平日はお寺におらず、週末に纏めて法務を務めることが多かった。月参りに回ることもできないため、ご門徒との交流の時間は限られていたが、教え子にご門徒の子弟が多かった事もありご門徒からの信用は厚かった。

そんな浄信は日頃から、「このお寺はお寺だけでは食っていくことはできないが、地域のご門徒が最後の一人になっても、絶対にお寺を閉めてはならん。最後の一人までしっかりと寄り添っていくのが住職の務めだ。」と言っていた。慶信も子どもの頃は素直に納得していたが、やがて思春期を迎えると、「これから先、消えていくかもしれない集落のお寺を維持するために、自分の夢や希望を捨てろと言うのか。」と反発するようになり、両親の反対を押し切って北陸地方にある国立大学の工学部に進学し、大阪に本社があるコンピュータシステム設計会社に技術職として就職した。

就職して5年目の春、大学の2学年後輩だった妻芳子と結婚し、後に2人の子どもを授かった。芳子は福井県の出身で、実家は浄土真宗本願寺派の門徒。教員だった父に憧れて慶信が通う大学の教育学部に進学した。大学卒業後は、僅かな期間ではあったが、福井県内の小学校の教員をしていた。また、高校生の頃から続いているスキーは、インストラクターのライセンスを持っている。今は殆どゲレンデに行くことはないが、できれば子どもたちに勉強やスキーを通じて何かを伝える仕事がしたいと考えているようだ。

気がつけば結婚してから15年、家族のためと思いがむしゃらに仕事に打ち込んできた。盆や正月には家族を連れて帰省こそするが、それ以外はお寺のことを考えることもなく過ごしていた。父浄信がくも膜下出血で倒れたのはそんな時だった。病院へ搬送したときには既に手の施しようが無く、意識が戻ることも無いまま2日後に息を引き取った。

慶信は、僧籍こそもってはいたが法務の経験も殆ど無いため、慶信一人では大変だと隣町にある東光寺のご住職（当時47歳）が全てを取り仕切ってくれた。慶信は、喪主として葬儀くらい出せると思っていたが、準備が進められていく中で装束や莊嚴の準備一つ分からない自分の無知を痛感させられた。

慶信は、還骨勤行が終わってから改めて東光寺のご住職に丁寧にお礼を言った。「高校時代にお世話になった先生だから、最期くらい何かお手伝いしたいと思っただけです。」と答えるご住職の顔は、何とも哀しげで温和な表情であった。その顔を見たとき、初め

て慶信の心に父親を失った喪失感と悲しみがわき上がり、人目を憚らず号泣した。

父淨信もきっと何人ものご門徒の最期に立ち会い、悲しみに寄り添ってきたのだろう。難しい言葉だけでなく、東光寺の住職のように葬儀に向き合う姿勢や表情などで大切なことに気づかせるお手伝いを、父はずっと担ってきたのかもしれない。「最後の一人までしっかりと寄り添っていくのが住職の務めだ。」というあの一言は、なぜお寺が必要なのかを知らせる言葉だったことに気付き、慶信は住職を継承しようと決心した。

そして、決心してから3年後、過酷な受験勉強や法務の手伝いを重ねてきた努力が実を結び、2回目の教師試験検定で合格して、ようやく住職を継承することとなった。

3 山積する浄慶寺の課題

住職を継承した慶信は、強い使命感と緊張感を感じつつも、これからお寺で尽くしていく将来に期待のようなものを感じていた。しかし、住職になって初めて見えてきたお寺の現状は、決して明るいとは言えないものだった。

真宗門徒にとって最も大事な仏事は、何を差し置いても「報恩講」である。確かに浄慶寺の報恩講も、ご門徒の殆どの世帯が参拝されるため、現在でも狭い本堂がひしめき合うほど賑やかに見える。しかし、よくよく眼を凝らしてみると、慶信住職が子どもだった頃と比較して、殆ど顔ぶれが変化していないことに気づいた。また、報恩講の準備を担ってくださるご門徒も高齢の方が殆どで、若手と言えるのは門徒である2人の幼馴染みだけだった。今は良いかも知れないが、近い将来に必ず報恩講への参拝は指折り数える程度になるかもしれない。その時には、きっと通常の法務も殆ど無っているのではと、言いしれぬ強い不安を感じ取っていたのだ。

浄慶寺の報恩講は、毎年11月第2週の木曜日から日曜日の4日間（三昼夜）で勤められてきた。勤修時期は、11月末の本山の御正忌報恩講（11月21日から28日）や10月の農繁期に重ならず、積雪の影響を受けづらい時期を選び、周囲の参り合いのお寺の報恩講とも調整し合って定められている。

また、毎座の儀式も一般寺院の報恩講の次第を忠実に守り続け、晨朝（40分）、日中（約1時間半）、逮夜（約1時間）がそれぞれ勤まる。驚くべきは日中法要で、組内寺院のご門徒（他寺院のご門徒を含む）で組織した「雅楽会」が袴を着けて外陣に出仕し、「樂入り」で法要が勤められていることだ。メンバーの高齢化は否めないが、「樂入り」で勤められる法要は、平常とは異なる厳かで凜とした特別感が漂う。

勤行は、『正信偈』真四句目下や『文類偈』、八淘の念佛和讃といった通常は僧侶のみで勤められる次第だが、ご門徒が同じく声を出して勤められている。このようなお勤めができるのは滋賀や岐阜、北陸地方の一部の寺院くらいのものだろう。その意味では、「無形文化財」と言っても過言では無いほどの価値があるとも言える。

日中と逮夜の勤行の後には、大谷大学で教鞭を執っていた、組内の最道寺のご住職から1時間ほどのご法話をいただいている。聴衆のみなさんは喜んでお話を聞いてくださっているが、聴衆のメンバーは固定化しているようにも窺える。お話の内容は噺みしめながら聞き続けていけば、若い人々にもきっと響くものがあるはずなのだから、輪の中に溶け込んでいける入り口があればと感じることもある。

お斎は、親鸞聖人の好物だと言われる小豆を使った赤飯や胡麻豆腐などの精進料理が朱塗りの椀に盛り付けられ、お膳で丁寧に振舞われる。坊守と女性のご門徒が協力して2日間をかけて仕込まれた精進料理は、飽食と呼ばれる現代社会では一見地味な食事だと目に映る人もいるかもしれないが、今でも報恩講を大切に勤めたいと願う方々を「ご法体」と敬いもてなす「究極」とも言うべき価値がある。

しかし、報恩講の準備は内陣の荘厳やお華束の準備、4日間に亘る法要期間のお斎の準備など、想像以上に負担になることが多い。まして、重たい物や高い場所に設置しなければならない物なども多いため、高齢者に作業を頼むことが憚られるような作業も少なくはない。それでも、ご門徒の方々は年に一度の報恩講だからと、文句一つも言わずに協力してくださっているが、若手が準備に関わることを期待するのは難しい。

伝統的な儀式形態や地域の風習を崩すこと無く勤めていこうと思えば、それなりの人足が必要になる。永らく伝統されてきた「御講汁」も、準備にかかるご門徒の負担が大きく継続することが難しくなってきたため、浄慶寺では5年前に振る舞うことをやめた。一方で、勤行や御伝鈔の拝読、ご法話については、現状を維持していきたいという意思がご門徒にもあると聞く。

これまで大切にしてきたものを次の世代（子ども世代や孫世代）へと受け継いでいくためには、一体どうしたらいいのだろうか。若者たちに強い負担を強いること無く、地域で大切にされてきた報恩講への思いを脈々と受け伝えていく方法など果たして存在するのだろうか。

頭を抱える慶信住職を見て、芳子坊守（42歳）が「どうしたの？」と声をかけた。芳子は父を亡くして弱り切った母を支えながら、平日はいない慶信住職に代わってお寺の会計や事務、境内の整備や内陣の荘厳などを一手に担い、健気にお寺のために尽くしている。粘り強く取り組む芳子の姿勢にご門徒の信頼も集まり始め、最近では、わからないうことがあると「坊守さん」と芳子を呼び止めるご門徒の姿が多くなってきた。自分以上にお寺のために尽くしている芳子なら、何か名案があるかもしれないと慶信は素直に自分の悩みを打ち明けた。

「なるほどね。確かに難しい問題だわ。そういうえば、教区通信にこんなチラシが入ってたんだけど、ダメもとで行ってみたら？」と芳子が1枚のチラシを渡してきた。

チラシには「元気なお寺づくり講座」と書いてある。何やら経営学の理論や「フレームワーク」を使いながら、お寺が持つ力を活かした継続的な「寺業計画」を作成する講座らしい。内容はともかくとして、講師として紹介されている男の写真は、宗務役員とは思えないほど人相が良くない。怪しさは深まるばかりだが、教区の事業だという一点だけを信じて参加することにした。

4 「元気なお寺づくり講座」に参加して見えてきたこと

全5回の講座で、1回目は「外部環境分析」、2回目はお寺の強みを活かした「お寺の将来像」作りと企画案の作成というテーマで進められてきた。内容は少し難しいようにも思えるが、単なる「金儲け」のためのものではないことが分かり、懐疑的な視点は少し薄まったように思える。また、ご門徒と一緒にお寺作りについて話し合う機会を得られた意

味は大きい。一緒に参加してくださった責任役員の藤田 平さん（72歳）と総代の中村 勝広さん（49歳）は、自分一人では気付かないお寺の強みや環境変化の機会や脅威を指摘してくださり、本当に頭が下がる。

次回は、いよいよ具体的な行動計画（企画内容）を考えることがテーマになっている。慶信住職は、行動計画を作成する前の準備作業として、これまでの学習内容を踏まえて、藤田さんや中村さんと話し合いをしながら浄慶寺の「外部環境」と「無形の価値」を「事業計画書®」に書き込んでみた。

確かに、交通の利便性は決して良くないし少子高齢化が進んでおり、周辺環境の変化は厳しいものがある。しかし、自然を求めて多くの観光客が押し寄せていることを見ても、都会にはない青少少年の可能性を開く資源が揃っているのは疑いない。また、日常的な付き合いは地元に残る高齢の方に限られるかもしれないが、若手の人々とは季節ごとに会って関係を繋いでいける可能性はあるかもしれない。そもそも、兼業で運営できる寺院であるから、季節ごとに会う場を設けることは浄慶寺の運営スタイルにも適している。

また、強みを見れば結束力が強いご門徒の存在や新米住職を支えてくださる近隣寺院の存在はとても心強い。何より先代住職から続く「最後の一人まで寄り添う」という精神は、浄慶寺のご門徒にまで広く共有されていることは何物にも代えがたい無形の価値だ。

「事業計画書®」に改めて書いてみたものを見ながら、責任役員の藤田さんは「まだまだ、捨てたもんじゃない。」と嬉しそうに言う。総代の中村さんも、「この勢いで使命を考えてみたら、どんなことが書けそうか。」と楽しそうだ。

すると、空かさず藤田さんが「使命は、これまで大事にしてきたことに私たちの思いを重ねて表現すべきだから、浄信さんが言っていた「最後の一人まで寄り添う」ことを外してはならんと思う」と語る。確かにそうだ、浄慶寺の使命はその言葉に尽くされている。

「確かにそうですね。最後の一人まで寄り添うというのは、まさに仏様の「摂取不捨」という願いとも重なっていますしねえ。」と慶信が何気なく呟くと、「それだ!!」と藤田さんが大きな声をあげた。「『摂取不捨 一あなたを一人ぼっちにしないお寺がここにあります』っていうのはどうだ?いつも、優しかった浄信さんの顔が思い浮かぶような気がしないか?」と語る藤田さんの目が潤んでいる。中村さんと慶信住職は、黙ってただ深く頷くことしかできなかつた。

藤田さんのおかげで、お寺の使命ははっきりした。では、その使命に謳われたお寺の役割を全うした後に、どんな将来像を描くことができるのか。3人は「お寺の将来像（ビジョン）」について話し始めた。

「日常的に孤独感を味わっているのは、恐らく高齢者の方々だろう。何か、定期的に役割が与えられたら張り合いにもなるし、仲間に会うことで孤独じゃない安らぎみたいなものを得られるんじゃないか?」と中村さん。中村さんも10年前に脱サラして農業を継いだUターン組の一人だ。名古屋から戻ってきてからの暮らしを見ると、父親は米作りを中村さんに伝えるを通じて、母親は孫の世話を追われる毎日を送る中で、それぞれ若返ったように元気を取り戻しているという。この視点は大事にしたい。

すると、藤田さんが「それと、若い人が同じ場所にいるだけで、何となく雰囲気が明るくなる気がする。次の世代への縦の繋がりや、そこから派生する横の広がりが期待できる

ような気がして、将来への期待感みたいなものを感じる」という。これもいい視点だ。地元に残る親世代と、子ども世代や孫世代が一堂に会する場ができれば、どこかで見守られている「安心」を感じることにも繋がるのではないか。

そして、「住職、年中行事の在り方を積極的に見直してみてもいいんじゃないかな？もちろん、法要の儀式や法話の形を変えることは望んではいない。むしろ、そういったものが「大事やな」と実感できるような仕組みを考えてみてはどうだろうか」と藤田さんが続けて言う。なるほど、浄慶寺が守り続けてきた仏事の価値を、次世代に伝わるように見える化するということか。

「確かに、価値の見える化は大事だと思う。そこに加えて、次世代の人々がお寺に足を運びたくなるような仕組みを作ることも大事だと思う。お寺に足を運んでもらって、お寺で子ども達へ伝えていくような仕組みも大事ではないか」と中村さんが続ける。お寺にお参りしたくなるような価値が見えなければ、若い世代の人々は貴重な休みにお寺へ参るという選択をする訳がない。積極的な理由になるような仕組みを作ることは欠かせない。

慶信がここまで話し合いの内容を整理すると、仏事の価値を次の世代に伝えていく取り組みを通じて、高齢者に役割が与えられるとともに、次世代の人々とも一体になって一人ひとりのご門徒に寄り添っていくお寺作りをするという方向性が見えてきた。これには、藤田さんも中村さんも「ふんふん」と大きく頷いている。

では、3年という時間軸でこの方向性に合致した将来像を組み立てるしたら、まずはどこを軸にして考えていったらよいか。そう尋ねると、中村さんは「ご住職、一番悩んでいるのは、報恩講の将来だって言ってたでしょ？報恩講は、真宗門徒にとって一番大事な仏事だっていうなら、まずは報恩講の再構築を最優先で考える必要があるんじゃない？」という。それだ、報恩講の再構築を考える中で、高齢者に役割が与えられ、次世代へとの価値が伝えられていくような仕組みづくりをする。そして、一人ひとりが寄り添われることの安心を実感できるような報恩講を実現することが目指すべき浄慶寺のビジョンだ。

中村さんの意見を受けて、「報恩講のサイコウを通じて、サイコウのお寺づくりをする」ことを今後3年のビジョンとしてはどうかと提案すると、二人とも笑いながら「ダジャレはくだらないが、中身はサイコウだ！」と賛同してくれた。

名付けて「報恩講サイコウプロジェクト」。2週間後に二人と再び話し合いをすることになっているが、それまでに、藤田さんと中村さんにはこれまでの報恩講の運営について見直すべきことや新たに取り入れる視点を整理してきていただく一方で、慶信住職は次世代の人々が報恩講にお参りしたくなるような新たなご縁作りの企画を考えて持ち寄ることになっている。二人は、きっと外部環境や無形の価値に着眼しながら、積極的に見直し点検を進めてくれるだろう。自分もその思いに応えねばと奮い立たせ、慶信はパソコンの画面に向かった。

5 淨慶寺の年中行事一覧

(1) 年中の行事

時期	行事	備考
元日	修正会	晨朝及び日中のみ（歳末昏時勤行を逮夜に相当するため）。 勤行後に法話あり（講師は住職）。 晨朝後、お斎の代わりに雑煮を振る舞う。 晨朝は役員10名程度、日中はご門徒15名程度が参拝。
3月下旬	春季彼岸会法要（日中・逮夜）	法要は1日で2座を勤める。 法要後に法話あり（講師は住職）。 日中・逮夜ともにご門徒15名程度が参拝されている。日中後に手作りのお斎がある。
4月下旬	永代経法要（日中一座のみ）	法要は一座で勤める。 法要後に法話あり（講師は組内住職）。 ご門徒20名程度が参拝。前年4月より当年3月までにご葬儀を勤めたご門徒は必ず参拝。お斎は手作りではなく仕出し屋の弁当を配布。 併せて当該年度の門徒総会を開催。
8月中旬	盂蘭盆会	住職がご門徒宅をまわってお内仏での勤行をするためお寺での法要はなし。
9月下旬	秋期彼岸会（日中・逮夜）	法要は1日で2座を勤める。 法要後に法話あり（講師は住職）。 日中・逮夜ともにご門徒15名程度が参拝されている。日中後に手作りのお斎がある。
11月 第2週	報恩講	三昼夜で法要を勤める。具体的な内容はケースに記載のとおり。
大晦日	歳末昏時勤行	午後4時より勤行。 勤行後、住職より挨拶あり。 お斎はないが年越しそばを振る舞う。 参拝は役員10名程度。 鐘楼堂がないため除夜の鐘はなし。

(2) 定期開催の行事

①婦人会

毎年2月から隔月で聞法会を開催。報恩講に同じく最道寺の住職を講師に迎え、『歎異抄』を繰り読みしている。10月は報恩講前のため仏具の「おみがき」を実施。當時10名程度の参加がある。ただし、参加者の平均年齢は65歳で10年前からメンバーに変化がない。淨慶寺にとってなくてはならない人の繋がりだが、このままで消滅の危機も否定できない。

②役員会

責任役員2名と総代3名（うち1名は婦人会長）に世話役1名と会計1名を加えた7名で構成。毎年3月中旬に開催し、門徒総会で提案する当該年度決算や次年度予算案、次年度の事業計画などについて検討。検討とはいっても前年踏襲型の事業計画を続けることに慣れてしまつており、実際のところ、事業の抜本的な見直しなどを検討したことではない。

ただ、役員は献身的に寺院の運営に協力しており、総代3名は新たに住職となった慶信のパートナーとしてこれから時代を担つて欲しいという責任役員の藤田さんの願いから、40～50代の男性と婦人会長に参画していただくことになった。

じっくりと話をしてみれば、現在のお寺の運営や行事に対して考えておられることが多く、今後のお寺づくりを考える上では、更にコミュニケーションを深めていくことが必要だ。

③子ども会（10年前に消滅）

前住職である淨信が高校の教員であったこともあり、10年前までは淨慶寺にも子ども会があった。4ヶ月に1回程度の頻度ではあったが、春夏冬の長期休暇に併せて開催していたため、里帰りした子どもたちが参加していること也有り、大いに賑わっていた。

子ども会とは言っても、単純にレクリエーションやゲームなどではなく、夏休みや冬休みは宿題を片付けるため「寺子屋」や、春は山に入つて自然体験をする散策活動などをしていたため、子どもが楽しいか否かは別としても預ける方の親は大喜びだったようだ。

それでも、近隣の小学校が廃校した影響は大きく参加者は少しづつ減少していき、淨信も体力が落ちてきたことも重なり、10年前に閉会することになった。

もう一度、子ども会を復活させることは、簡単なことではない。現代の子どもたちは目移りするほどの玩具やゲームに囲まれているばかりか、野球やサッカーのクラブチームや学習塾、ピアノなどの習い事などで忙しく、「子供だまし」のレクリエーションやゲームなどのためにわざわざお寺へ脚を運ぼうとはしない。

子どもたちにとって、あるいは親にとって余程「得るもの」がある仕掛けを作らなければ子ども会の復活は現実的ではない。

ただ、「得るもの」を提供できる能力に長けた人材は、意外と身近なところに居たりするものだったりもする。

以上